

# 田村の館と田村ばやし

— 鎌倉時代 —



「ふう…」

第四代鎌倉幕府將軍ぼくくさの藤原頼経ふじわらのよりつねは、ため息をもらしました。將軍とはいえ、まだわずか十歳です。ここ鎌倉御所よしで毎日家臣の報告を聞いていても、よくわからないで返事をしています。

そんな頼経の様子を見て、幕府の重臣の三浦義村みうらよしむらが声をかけました。

「上さまうえ、気晴らしに、こんど、田村にある私の館やかたに参りませんか」

「それはよいな」

「上さまを京都からこの鎌倉にお迎えしたときにも、お立ち寄りいただいたところです」

「私はそのとき、二歳だったと聞いている。なにも覚えてはおらぬ」

「そうでした。尼御台あみみだいのひざの上でじっとしておられました」

尼御台というのは、鎌倉幕府を開いた源頼朝みなもとのよりとせの妻である北条政子ほつじょうまぎのことです。政子の息子である三代將軍実朝じねとせは、甥の公暁おいに暗殺され、源氏の血筋は絶えてしまいました。

そこで、新しい將軍候補となったのが、摂関家せつかんけである九条家の四男だった三寅みとら（のちの頼経）でした。摂関家というのは天皇を補佐する摂政せつしやうや関白かんぱくという役職に就く位くらひの高い家柄です。三寅は幼名いぢみで、寅の年、寅の日、寅の刻ときに生まれたことからこの名がつけられました。三寅が京都から鎌倉に来たのが健保七年（一二一九）です。嘉祿二年（一二二六）

年には八歳で征夷大將軍になりました。

安貞二年（一二二八）七月、頼経は田村の館に向け鎌倉を出発しました。馬にまたがり多くの武者を引き連れた頼経が、相模川を渡ります。

「もうじき、田村の館です」

供の指さす方に、館が見えました。

「ようこそお出でくださいました」

義村が出迎えます。義村は、將軍を迎えるために館とは別に御所を新築しました。その御所から館の外まで渡り廊下をつくり、その左右に見事な花々を植えました。

御所で一息つくと、武者たちが笠懸を披露しました。馬に乗って走りながら、遠くにつるした笠を的にして矢を射るのです。

日ごろ磨いた自分の技を將軍に見てもらおうとみんな張りきりました。



その日の夜も、頼経の前には、義村が用意したおいしい料理が並びます。

「本日は、京の都から楽人（がくじん音楽家）たちを呼んでいます」

そう言って義村が手をたたくと、楽人たちが入ってきました。笛ふえや鉦かね、太鼓たいこで調子をとりながら、それに合わせて、踊子おどりこの女性たちが舞い踊ります。

「京の思い出など何もないが、なんだかとても懐なつかしく楽しい気分だ」

頼経は、義村の心遣いこころづかいにとっても満足しま

した。そうして田村の館に二泊したのち、鎌倉へ帰ったのでした。

田村の里さとの村人たちも、頼経がいる間に館からもれてくる音楽を聞いてとても豊かな気持ちになりました。

「とてもいい音色ねいろじゃのう」

「われらの里のまつりにあんな曲かなが奏かなでられたらなあ」

そんな村人たちの声を聞いた京の楽人たちは、よろこんで自分たちの音楽を村人たちに教えました。

こうして長く伝えられてきたのが、今の田村ばやしだといわれています。